宮乃木神楽団「大和 葛城」
photo by yuk☆kii

新たなる挑戦

宮乃木神楽団結成15周年

平成25年12月8日(日) 開場10:00／開演11:00
終了予定18:30頃

広島県北広島町 千代田開発センター

全　席 自由席

共通前売券 **1,200**円・当日券 **1,500**円

小・中・高校生は **500**円（当日券のみ）小学生未満無料

お問い合わせ 北広島町観光協会　主催 広島･島根交流神楽実行委員会

☎ **0826-72-6908**

※やむを得ず演目･出演団体などが変更になる場合がございます。

プログラム

1. 神迎え　梶矢・宮乃木神楽団合同
2. 式三番　大都神楽団
3. 岩戸　琴庄神楽団
4. 八岐大蛇　山王神楽団
5. 八十神　石見神楽亀山社中
6. 大和葛城　宮乃木神楽団
7. 大江山　梶矢神楽団
8. 宮乃木神楽団 団長2代目襲名披露

1. 神迎え 梶矢・宮乃木神楽団合同

集いたまえや四方の神々。

秋の収穫を終え、五穀を豊かに授けてくれた大自然の神々をお迎えして、神々に感謝の気持ちを表す神楽。農耕儀礼としての神楽を奉納する最初の儀式舞いです。四方、東西南北、四季、春夏秋冬の神様。暮らしの中に宿る、木・火・金(鉄)・水の神さま、八百万の神々を舞台の中央・神座(かみくら)にお招きして神楽を楽しんでいただきます。

結成15周年を迎えた宮乃木神楽団が、結成の時から師匠神楽団と仰ぐ梶矢神楽団の共に、この会場に集い頂いた皆様に感謝の心いっぱいに舞い納めます。皆様に幸多かれと祈りながら・・・。

2. 式三番 大都神楽団

日本の古典芸能から広がった式三番は、おめでたい行事の時、親愛の情をもって祝言(しゅうげん)の舞いとして奉納します。

もともと天下泰平・無病息災・五穀豊穣を祈念して翁は地域や組織・団体の長(おさ)千歳は活力ある若者。三番叟(さんばそう)は、米づくりの農業者。などそれぞれの意味と意義をもって神聖にまた楽しく舞い納めます。

3. 岩戸 琴庄神楽団

神々の中の最高峰・太陽である天照大神(あまてらすおおみかみ)は、弟、須佐之男命のたび重なる乱暴を嘆かれ天の岩戸へお隠れになりました。すると天も地も常闇(とこやみ)の世となり、悪神ははびこり作物は枯れ、不安な日々が続きました。そこで、天の兒屋根命(あめのこやねのみこと)をはじめ高天原(たかまがはら)の神々は、岩屋の前に集まって大神のお出まし計り宴をはじめました。天鈿女命(あめのうずめのみこと)は舞い狂い、神々は大騒ぎになりました。岩屋の前の騒ぎを不思議に思われた大神が少し岩屋を開かれると、これを待ち受けていた天の手力男命(あめのたちかろうのみこと)が更に押し開き、めでたく大神をお迎えします。

世の中に、光と平和が戻ります。この鈿女命の舞いが、神楽のはじまり、わが国の芸能の起源とも言われています。

この物語は、わが国の神話として知られていますが、古代より私たちの先祖は太陽讃歌と共に、自然崇拝の暮らしを築いてきたことを伝えているのです。

4. 八岐大蛇 山王神楽団

出雲の国に暮らす足名椎・手名椎の老夫婦に八人の娘がいましたが、年毎に一人また一人と山から出てくる大蛇に飲み取られ、七人を失いました。そして、八人目の娘、奇稲田姫が飲み取られる季節となり、三人は肩を寄せ合い嘆き悲しんでいました。そこへ、高天ヶ原から舞い降りた須佐之男命が通りかかり訳を聞きます。命は、大蛇退治を決めて、老夫婦に八塩折(やしおり)の強い酒を造らせます。この樽酒の後に姫を立たせると、やがて黒雲が立ち込めて大蛇が現れ、酒に映る姫の姿を飲んでいきます。大蛇はしだいに酔い回るほどに暴れ狂い酔い伏してしまいます。これを待ち構えていた命は、一頭づつ切り取っていきます。最後に大蛇の尾を斬り裂くと、一本の刀が出てきます。

これを天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)と名付け、天照大神に捧げることにします。命は、奇稲田姫と結婚して平和で豊かな出雲の国で暮らしていくという物語です。

これは、我が国の神話として知られていますが、七重八重に連なる中国山地の古代の営みを伝えるものといわれます。

5. 八十神 石見神楽亀山社中

大国主命(おおくにぬしのみこと)とその兄弟の神々・八十神(やそがみ)は、因幡国(いなばのくに)の八神姫(やかみひめ)と結婚したいと思っていました。しだいに八神姫の心は、大国主命へ惹かれていきました。すると、八十神たちは大国主命を殺害して八神姫を手に入れようと、焼き石を投げつけたり、大きな木の割れ目の中へ命(みこと)を押し込んだりします。

大国主命は、父須佐之男命(すさのうのみこと)から授かった生弓矢(いくゆみや)の徳によって八十神たちを降参させるという物語です。

6. 大和葛城 宮乃木神楽団

この神楽は、宮乃木神楽団独自の脚本として作られ、日本神話『神武東征』で生まれた土蜘蛛と大和(奈良県)・葛城山の由来を伝える物語です。

今から約2600年の昔、初代天皇・神武は日向(宮崎県)の国から瀬戸内海を渡り大和の国をめざしました。西の国から古代国家統一の戦いを続け東の国へ向ったので、神武東征と言われます。一団が大和へ上陸すると、身の丈が低く手足の長い一族が攻撃をして来ました。これに対し、神武軍は葛(かずら)で作った網を張り、この一族を打ち破りました。わずか生き残った彼らは、大和盆地を見下ろす山へと逃げ去ったのです。逃亡者たちは、この山へ横穴を掘り土蜘蛛のごとく野の草を食べ土をなめ息をひそめて生き延び、後に彼らは土蜘蛛族と蔑まれ、また彼らが葛で打ち取られたことからこの山を葛城山と呼ぶようになったのです。

歴史は流れ流れて平安時代も中期のことです。武勇の誉れ高い源頼光が都の治安を守っている頃、頼光の館へ、遠く大和葛城山から幾世代もの怨念を背負う土蜘蛛が襲い来たのです。

7. 大江山 梶矢神楽団

平安時代も中頃、世の中が乱れはじめると、一条・戻り橋に鬼が出た。羅生門に鬼が棲むとうわさが流れ、都の夜は鬼たちの舞台になったのです。そこで、都の守り源頼光は、鬼退治の勅命を受けます。そして、鬼の棲すみ家を陰陽師が占うと、丹波の国 大江山だったのです。頼光とその四天王は、岩清水八幡に参拝して武運を祈り、大江山をめざします。途中、三世ヶ託(さんせがたく)の神さまが現れ、人が飲めば活力を生み鬼が飲めば毒となる人便鬼毒酒(じんべんきどくしゅ)を授けてくれます。

山の麓に巡り着くと都からさらわれてきた紅葉姫が布を洗っています。この紅葉姫を道案内に酒呑童子の館へ入ります。山伏姿の頼光と四天王を不信に思う酒呑童子は、一行の姿・形を問いかけますが、頼光の応答に納得して、人便鬼毒酒を都の酒として飲みます。鬼たちに酔いが回る頃、山伏の持つ錫杖(しゃくじょう)を刀に変えて、頼光と四天王は、鬼たちに戦いを挑みます。
壮絶な戦いの末、鬼たち全てを討ち取ります。

15年前、高校生だった当時の新入団員が結婚し幼子を抱いたり、子どもの運動会を口にするようになりました。神楽団の結成と同時に「宮乃木神楽団」の魂をつくろうと石見系広島神楽の大御所高宮町の梶矢神楽団 故・方井司良(かたいしろう)氏から、神楽の原点・伝統・創作という教えを乞う為、高宮町へ出向きました。

神迎え・天の岩戸・岩見重太郎などの演目を練習し、人気のある実力のある神楽団を目指しました。おかげで最近は、年間50回を超える公演数となりました。

振り返ってみると、15年の重なりは、宮乃木神楽団一人ひとりに様々なことを教えてくれました。このたび共演していただく神楽団は、最愛の友であり最強のライバルです。彼らとの結び付きは、偶然ではなく、私たちが成長するために必然として手を結んできた神楽仲間だったのです。

ゼロからの旅立ちで、過去の苦労話はいくらでも出来ます。しかし、新時代を迎え宮乃木らしい新しい神楽の魅力を発信させるために世代交代を宮乃木神楽が求められている気がします。

年々、神楽の公演環境も変わってまいります。

新しいリーダーたちが、宮乃木神楽団の歴史へ挑戦してくる時が来たようです。この交代劇を月一の舞いで演じられることに感謝します。

宮乃木神楽団団長 管沢 秀巳